

切ない歌集

ようやく出たか、よく出してくれたという思いで、歌集『蜜の大地』を手にとった。谷岡亜紀、馬場昭徳両氏の熱意がなければ到底実現しない仕事であっただろう。歌の友を持つというのはいいものであるが、そんな友を引き寄せたのは、小紋潤という歌人の人となりであったに違いない。

佐佐木幸綱氏が帯に「短歌はついに人間なのだ、古くから言われてきたこの言葉がこれほど似合う歌集はめつたにない。どの一首をとりあげても、小紋潤の声が聞こえる。小紋潤の息づかいが感じられる。そこに小紋潤その人がいる。」と書いているが、私もまさに同じ感想を持った。佐佐木氏がどのような側面を捉えて言っているのかはわからないが、この歌集の歌たちは、まさに私が感じてきた小紋潤その人を目の前に披いて見せてくれるものであった。

小紋と私と小池光は同じ昭和二十二年

の生れである。三十代から小紋との付きあいは始まったが、特に雁書館の季刊誌「現代短歌雁」の編集委員になってからは、定期的に、そして頻繁に会うことになり、会えば必ず飲むことになった。塚本邦雄を読むということで小池と対談した夜のことにも楽しい記憶として残っているし、思い出を書き始めるときりがない。

一つだけ、小紋が京都の私の家に泊りに来た夜のは、『あの午後の椅子』（白水社）に書いたことがある。その頃、わが家に書生のような学生が居て、小紋と議論になった。表へ出ると先に言ったのは、たぶん小紋の方だったが、誰が見ても小紋に勝ち目はない。出ていったきり、いつまでたっても帰ってこない。仕方なく外へ出てみると、案の定、月夜の路上で殴り合っている。もちろん馬乗りになっているのは、若い学生の方である。やめろと言ったら喜んで引

永田和宏

き上げてきたが、二人が意気投合して朝まで飲んだことは言うまでもない。

冒頭に近く、

人生有窮拙

日暮聊飲酒 李賀

なる漢詩が置かれている。「陳商に贈る」の一節であり、「人生窮拙有り 日暮聊か酒を飲む」と読む。この詩の冒頭には「長安に男兒有り 二十にして心已に朽ちたり」があり、また小紋の引用した句の後ろには、「祇今道已に塞がる 何ぞ必ずしも白首を須たん」とある。たまたま中国詩人選集を開くと、私も同じフレーズを囲っていたのに驚いているが、小紋がこの一句を配いた思いはわかりすぎるほどにわかる。

・ 仰ぎ見る空かち渉る風の声まこと孤りの己れと思ふ

・ よるべなき思ひにあれば今日ひと日ひとり歩みてゐる林なり